

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02261

研究課題名(和文) 19世紀ドイツにおけるユダヤ学の成立に関する思想史的研究

研究課題名(英文) The Establishment of Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums) in Nineteenth-Century Germany. From the Perspective of Intellectual History

研究代表者

佐藤 貴史 (Takashi, Sato)

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：70445138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀ドイツにおけるユダヤ学の成立と変容を、二つの観点すなわちユダヤ学を分析する方法論の確立と具体的なテキストの解釈に基づいて考察した。第一の観点に関しては、ユダヤ学を分析するためには当時のユダヤ教がおかれていたコンテクストを解明する方法が必要であることがわかった。第二の観点に関しては、とくにイマヌエル・ヴォルフのテキストの解釈を通じて、ユダヤ学における信仰と歴史の緊張を明るみに出した。結果的に、本研究はユダヤ学研究における基礎的視点を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、わが国の宗教思想研究においてほとんど手つかずの状態に残されていた19世紀ドイツ・ユダヤ思想史、そのなかでもユダヤ学の研究にとって必要ないくつかの基礎的視点を提示できたことである。また本研究の社会的意義は、ユダヤ教という、ときに怪しい陰謀論と結びつけられる宗教を学問的に研究する伝統がヨーロッパにあることを指摘できたことである。これは、「宗教」という言葉にある種の先入観をもつ傾向が強いわが国の文化にも一石を投じることができるはずである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the establishment and transformation of Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums) in nineteenth-century Germany from two perspectives: the formation of a methodology for analyzing Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums) and the interpretation of several important texts. Regarding the first perspective, to analyze Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums), using a method to clarify the context in which German Judaism existed at that time was found necessary. Regarding the second perspective, I have highlighted the tension between faith and history in Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums), especially through the interpretation of Immanuel Wolf's text. Consequently, this study has provided basic perspectives for examining Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums).

研究分野：ドイツ・ユダヤ思想史

キーワード：ユダヤ学 歴史主義 聖書解釈 文献学 ユダヤ神学部 レオポルト・ツツ イマヌエル・ヴォルフ アブラハム・カイガー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本におけるドイツ・ユダヤ思想史研究は、優れた研究者によって高い質を保持してきた。とくに20世紀を対象にした研究は、三島憲一、村岡晋一、合田正人、細見和之などによって着実に進められてきた。たとえばフランツ・ローゼンツヴァイク、ヴァルター・ベンヤミン、フランクフルト学派などの研究・翻訳をあげることができる。

このような特筆すべき研究状況のなかで不釣り合いともいえるほどに立ち遅れているのが、19世紀ドイツ・ユダヤ思想史の研究である。もちろん植村邦彦や野村真理などが「ユダヤ人問題」、カール・マルクス、シオニズムを扱った重要な研究を公にしている。しかし、19世紀ドイツにおいてユダヤ人自身がユダヤ教を弁証するために必要とした「ユダヤ学」(Wissenschaft des Judentums)の成立と変容に関する研究は、日本においてほとんど未開拓の領域として残されているといってもよい(簡潔に述べれば、ユダヤ学とはユダヤ人差別を解消するために、国家的・民族的解決とは別に、ユダヤ教を学問的＝歴史批判的に研究することで、ドイツ社会におけるユダヤ教への偏見・憎悪を除去しようとした近代ユダヤ人の一大学問運動である)。

2. 研究の目的

このような研究状況を踏まえて、本研究の「目的」は国家や民族の問題に限定せず、宗教思想的・学問史的観点に基づいて、19世紀ドイツにおけるユダヤ学の成立と変容を考察することであり、それをもってわが国のドイツ・ユダヤ思想史研究に貢献することである。そのさい、以下の二点が本研究の目的を達成するための内容となる。

(1) 19世紀ドイツのユダヤ人思想家 本研究の分析対象としてはレオポルト・ツツとイマヌエル・ヴォルフは、ユダヤ教の宗教的規範性の維持とユダヤ教の歴史的正当化という二つの課題を担っていた。この困難な状況のなかでユダヤ学なる新しい学問が誕生するわけだが、本研究ではユダヤ学に内在する宗教的・規範的方向性と世俗的・歴史的方向性という相対立する内容が、近代ユダヤ人の思想にいかなる影響を与えたかを明らかにする。

(2) キリスト教神学とは異なり、ユダヤ学は大学のなかに講座をもったり、キリスト教会のような宗教権力によって社会的影響力を保持したりすることは困難だった。こうした状況のなかで、ドイツ・ユダヤ人はみずから新しい学問・教育組織(学術協会、ラビ養成学校、アカデミーなど)を創設した。本研究では、ユダヤ学に関する新組織をユダヤ人思想家の人文知的ネットワークとみなし、彼らが近代世界のなかでユダヤ教を再定義し、ドイツの社会や学術世界に対してユダヤ教の世界史的意義を弁証していく成功も挫折も含めたプロセスを解明する。

3. 研究の方法

ユダヤ学に関するテキストの多くは、書籍とは別に、当時のユダヤ人の学問・教育組織が発行していた雑誌に掲載されていたため、本研究もまた雑誌論文をテーマごとに分類・整理したうえで、その内容を分析する文献学的方法を採用することになる。また、当時のドイツ・ユダヤ人がおかれていたマイノリティとしての立場を踏まえると、テキストだけでなく、哲学史・宗教思想史・社会史的コンテキストもあわせて考察する必要があり、その意味では文献学的方法に基づいた思想史研究が本研究の方法論的立場となる。

なお、本研究は上記の「研究の方法」をさらに精緻化することもユダヤ学研究における重要なテーマだという立場をとっている。したがって、方法論的方法論的研究という再帰的構造が本研究のなかに含まれていることをここで確認しておきたい。

4. 研究成果

(1) 2017年度

2017年度は、レオポルト・ツツとイマヌエル・ヴォルフのテキストを分析するための枠組みや当時の哲学史・宗教思想史・社会史的コンテキストの検討に主眼を置いて研究した。当初、この課題は別の年度に予定していたが、精査した結果、先に着手したほうが今後の研究にとって有益であると考えた。明らかになったのは次の二点である。

第一に、19世紀ドイツに成立したユダヤ学はユダヤ教を学問的(＝歴史批判的)に研究すること近代ユダヤ人のアイデンティティを形成すること周囲の非ユダヤ的文化に対してみずからの立場を弁証することという三つの課題を担った学問である。こうした課題は当時の複雑なコンテキストのなかで生まれたものである。

M. A. マイアーはユダヤ学には「二つの持続する緊張」があると述べたが、上記のユダヤ学における三つの課題はマイアーの分析枠組みを批判的に読解し、本研究に組み入れたことで明らかになったものである。しかし、こうした課題を担ったユダヤ学は「学問としてのユダヤ学」と「学問の対象としてのユダヤ教」のあいだで揺れ動くことになった。これが学問としてのユダヤ学の成立可能性に関わる重要な視点であり、方法論的問題こそユダヤ学の成立のみならず、ユダヤ教と近代世界の複雑な関係を解明するうえでの鍵であることが判明した。

第二に、ユダヤ学に批判的だったフランツ・ローゼンツヴァイクのメシアニズム思想を考察す

ることができた。学問は人間の生に何も答えてくれないという問題意識をローゼンツヴァイクのような20世紀前半の若き知識人たちは共有していた。ローゼンツヴァイクもまた学問に見切りをつけ、非学問的なメシアニズムからの誘惑を受け入れたように見えながらも、彼の真理論は性急なメシア到来の要求に限界づけを設けようとした。ここにもまた「学問としてのユダヤ学」と「学問の対象としてのユダヤ教」の問題が示唆されているのである。

(2) 2018年度

2018年度は、19世紀ドイツにおけるユダヤ学の諸問題について掘り下げ、次の二点を解明した。

第一に、ユダヤ教の集合的記憶論で著名な Y. H. イェルシャルミのユダヤ学批判について考察した。彼によれば、古代・中世のユダヤ人は歴史叙述に関心を寄せることはなかった。しかし、近代以降、歴史叙述がユダヤ人の思想を捉えはじめ、それによってユダヤ教は根本的な変化を被ることになった。そのさい、大きな影響力をもったのが19世紀ドイツのユダヤ学であり、とくにヴォルフのユダヤ学の構想であった。本研究課題の一つはヴォルフの思想の解明に焦点を当てるものであるが、彼の思想が正当に評価されていない理由としてイェルシャルミの否定的評価が部分的に影響を与えているのではないかと考えることができる。ユダヤ学の全体像を解明するうえで、イェルシャルミのユダヤ学批判が一つの出発点になることが判明したと同時に、ユダヤ思想史のなかで記憶と歴史叙述の関係がユダヤ学とは無関係ではないこともはっきりした。

第二に、マルティン・ブーバーの聖書解釈・聖書学について考察した。ブーバーの聖書解釈方法論において神話や歴史の概念は重要な役割を果たしている。ブーバー自身ははっきり書いていないが、このような彼の傾向は合理的なユダヤ教理解を目指したユダヤ学に対する批判であることは明らかである。ユダヤ学の歴史理解とユダヤ教の歴史理解のあいだには大きな溝があるはずだが、ユダヤ学はその違いに無自覚だったところがあり、この問題はイェルシャルミのユダヤ学批判ともつながる重要な視点である。

ユダヤ学を正確に把握するためには、20世紀のユダヤ思想が行ってきた批判を慎重に検討し、それによって覆い隠された部分を丁寧に取り出す作業が不可欠である。2017年度の方法論の問題とあわせて、ユダヤ学研究の枠組みや視角をより明確にすることができたはずである。

(3) 2019年度

2019年度は、ツンツとヴォルフに加えて、アブラハム・ガイガーのユダヤ学理解を、当時のユダヤ教がおかれていたコンテクストを考慮しながら調査した。

2018年度はイェルシャルミやブーバーといった20世紀のユダヤ人思想家による19世紀ユダヤ学批判を考察し、彼らの批判によって覆い隠された部分を明らかにすることで、ツンツとヴォルフの思想の特質を明らかにする視点を獲得した。

2018年度の研究を踏まえて、2019年度は第一に複雑な状況におかれていた19世紀ドイツのユダヤ教を、(新)正統派、改革派、保守派、特定の教派から距離をおいた立場の四つに大きく分けて、当時の宗教的コンテクストを整理した。

第二に、ツンツやヴォルフは歴史学的・文献学的視点に基づいたユダヤ教文献やユダヤ史の解明に力を注いでおり、彼らの立場は当時のユダヤ学の典型とも言えるが、その内実をさらに明確にする必要性を感じた。それゆえ、2019年度はツンツとヴォルフの思想を分析すると同時に、改革派のガイガーの思想も考察し、ツンツならびにヴォルフと比較することで彼らの思想的特質を明らかにしようとした。

2018年度の研究成果が20世紀の視点からツンツとヴォルフの思想を分析しようとしたものならば、今年度は19世紀の宗教的コンテクストのなかでツンツとヴォルフの思想を考察したものである。ツンツとヴォルフの立場は、ガイガーと比べれば同時代のユダヤ教改革に対する視点が弱く、またキリスト教がもっていた反ユダヤ主義感情をユダヤ学を通じて批判するという視点は圧倒的にガイガーの方が強いことがわかった。ユダヤ学のなかには、客観的なユダヤ教理解を目指すツンツやヴォルフのような立場と学問の成果を通じて同時代のユダヤ教を改革したいという立場が並存していたのであり、この違いを踏まえることが重要であることが判明した。

(4) 2020年度と総括

2020年度はユダヤ学が抱えていたユダヤ教の「宗教的規範性」と「歴史的研究」のディレンマをテキストに即して明らかにし、総合的に本研究の内容をまとめることを目指した。

上記の目的を果たすために、今年度はヴォルフの「ユダヤ学の概念について」の一部を翻訳し、それに解説を付けて公表した。ヴォルフのテキストは、欧米のユダヤ学研究において必ず言及される最重要テキストである。しかし、わが国では彼の思想について論じられたことはほとんどなく、それゆえ、今回の翻訳は本邦初の試みである。

具体的に解明した点を述べれば、第一にヴォルフが示した Judentum の概念の意義を指摘した。彼にとって Judentum とはユダヤ教という宗教的現象にのみ関わる概念ではなく、ユダヤ人が関わるあらゆるものを含む歴史的な「総体概念」である。これはユダヤ学の概念を規定するためには、ユダヤ学の対象である Judentum の概念を規定しなければならないことを意味している。しかし、このような論の立て方は議論の順番といった形式的事柄ではなく、19世紀ドイ

ツの歴史意識をユダヤ教研究に適用したという意味では思想的解釈を要する重要な事態である。

しかし第二に、ヴォルフによれば、Judentum のなかでは「宗教的的原理」がもっとも大きく働いており、それは人類に多大な影響を与えてきた。とりわけ Judentum の理念を YHWH という神の名前に求めている点は、ユダヤ学が内包している「宗教的規範性」を示唆している。

本研究は緊張関係を重視した方法論的枠組みを初年度に設定し、それを洗練させてきた。最終年度はこの方法論的枠組みをヴォルフのテキストに適用して分析した結果、冒頭で述べたディレンマが明瞭になり、同時にこの問題設定はユダヤ学研究において有効な研究手法であることも判明した。

以上、四年にわたる研究成果について述べてきたが、結果的に次の四点にまとめて総括することができる。

本研究は20世紀のユダヤ人思想家がユダヤ学を否定的に評価したことが、ユダヤ学研究に不必要な先入観をもたらした点を明らかにした。具体的にいえば、イェルシャルミの『ザホール』はユダヤ思想における記憶の意義を掘り起こした名著だったが、記憶の側面を強調しすぎて、ユダヤ思想史において歴史叙述や歴史意識がもっていた意義、すなわち19世紀のユダヤ学の遺産を軽視する状況を招いてしまったのではないかと。

したがって、ユダヤ学を研究する者は、20世紀のユダヤ人思想家の仕事から多くを学んでも、不用意に彼らの目を通してユダヤ学を見ないようにしなければならない。言い換えれば、19世紀のユダヤ学者のテキストをみずからの目で確認し解釈するという、ある意味、当然の学問的手続きを踏むことが強く要求されているのである。

本研究は哲学史・宗教思想史を含んだ社会史的コンテクストを重視する研究方法を採用したが、それはユダヤ学研究にとって必要不可欠な方法であることが判明した。大きく見て、当時のユダヤ教は(新)正統派、保守派、改革派に分かれており、地域によっては必ずしも(新)正統派が強いわけではなかった。たとえば、フランクフルトでは改革派が大きい影響力をもち、(新)正統派はその地域共同体のなかに残るべきか、あるいは離脱すべきかで大きな論争を繰り広げていた。

こうした対立は主に礼拝の仕方をめぐって争われていたが(教義をめぐる対立が重要なキリスト教思想史とはここが大きく異なる)しかしその根底にはトーラーの性格をどのように理解するかという根本問題が潜んでいた。すなわち、トーラーを完全に神から与えられた無時間的な法だと考えるか、あるいは歴史を通じて人間の手が加わったものだとする当時の聖書学の知識を前提として考えるかで、まったく異なるユダヤ教理解が導かれるのである。

19世紀のユダヤ学研究の要は、教派間の対立という宗教社会的問題も含めた複雑なコンテクストを正確に把握することであり、本研究はこのような方法論的視点を再確認した。

本研究は、ユダヤ学者が関わった学問的組織の意義を明らかにした。とくに、ガイガーやツンツが大学のなかにいわずにユダヤ神学部を設けようという構想をもっていた点は重要である。当初の計画には明確なかたちで含まれていなかったが、「研究の目的」の(2)との関連で、この点は解明すべき論点であることがわかった。

ユダヤ人解放令が出て、基本的に不安定な状況のなかにはユダヤ人学者は、ドイツの大学にユダヤ教を研究する部門を設けることを望んだ。彼らは、オリエント学やキリスト教神学がユダヤ教を論じて、とくにキリスト教神学においては、ユダヤ教が二次的な存在としてのみ扱われることに大きな不満を抱いていた。ユダヤ学者にとって、ユダヤ人解放とユダヤ教の学問的研究の自立は表裏一体の事柄だったのであり、ツンツやガイガーのようなユダヤ学者は大学のなかで自立したユダヤ教の研究部門(ガイガーは明確に「ユダヤ神学部」を主張)を創設することを強く望んだ。

このような流れは、ユダヤ教のラビの役割の変化とも結びついていて、19世紀になると将来的にラビを目指す若いユダヤ人も大学に入学することが増えており、大学で学問的訓練を受けたラビ、der Rabbiner Dr.が登場しはじめた。さらにはタルムードの知識だけではなく、世俗的教養を備えたラビを求めるユダヤ人共同体もあらわれた。ガイガー(マールブルク大学から博士号を授与されている)は、プレスラウでの奉仕に名乗りをあげたが、彼の改革的傾向も相まって、当地の伝統的なラビと激しく対立したのであった。

以上のような点を確認するだけでも、重要なユダヤ学者は大学にユダヤ教の研究部門を創設することを求め、彼らはその要望を自分たちがドイツの学問世界で認められるために必要な措置だと考えていたことがわかる。すなわち、ユダヤ学の成立はユダヤ学者の大学理解と密接に結びついていたのである。

ヴォルフとガイガーのテキストを具体的に分析した結果、両者の Judentum(ユダヤ教/ユダヤ性)やユダヤ学に関する理解に大きな違いがあることが明らかになった。

ヴォルフにとって、Judentum はユダヤ人が関わるあらゆるものを示す「もっとも包括的な」概念であり、宗教としての Judentum をその内を含む「総体概念」である。また、「あらゆる人間の事柄」という表現が示唆するように、ヴォルフのユダヤ学は、神や律法のような宗教的理念だけを特別視せずに Judentum を理解するものとして構想されていたことがわかる。彼を含めた「ユダヤ文化学術協会」に集まったユダヤ学者はヘーゲルから強く影響を受けていたこともあり、ヴォルフの論文もヘーゲル哲学の色彩が濃い部分も見られるが、あくまで歴史的・包括的に Judentum を考察しようとする態度が前面に出ている。

このヴォルフの立場とは異なる議論をしているのが、ベルリンの「ユダヤ学アカデミー」で行

われたガイガーの講義である。そこで彼はユダヤ学を定義しながら、同時に Judentum の特殊性を強調している。「ユダヤ学は、ある特殊な領域のなかで活動していた精神生活がもっている独特な傾向の考察であり、その領域はまさに Judentum を築き、発展させ、広く知らせ、現在にいたるまで活力をもってそれ〔Judentum〕を育てているのである」。つまり、ガイガーは、Judentum を成立させる特殊な領域があることを認め、Judentum よりも広い概念である特殊な領域のなかでは、独特の傾向をもった精神生活が働いていることを主張している。簡潔に述べれば、ヴォルフは包括的な Judentum の定義を踏まえてユダヤ学を論じようとしているのに対して、ガイガーは Judentum が成立する特殊な領域やそこで働く独特な傾向に焦点を当ててユダヤ学を構想していたということができるだろう。

わが国では、ユダヤ学の研究はほとんどなされていない状況なので、以上の研究成果は今後のユダヤ学研究にとって必要な基礎的視点になるはずである。また同時に、最後に述べたヴォルフとガイガーにおける Judentum ならびにユダヤ学理解の比較は、国外においても本格的に研究されているとはいえない状況である。したがって、今後の展望としては、 から の研究成果を土台としながらも、 の研究成果をさらに追及することで、ユダヤ学の成立と変容のみならず、複数のユダヤ学の構造を解明することができると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤貴史	4. 巻 10
2. 論文標題 人間の哲学的発見 コーエンとローゼンツヴァイク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴史	4. 巻 第36号
2. 論文標題 マルティン・ブーバーの聖書解釈 神話、悪、想像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Sato	4. 巻 11
2. 論文標題 Messianismus und Wahrheit bei Franz Rosenzweig	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Rosenzweig-Jahrbuch	6. 最初と最後の頁 205-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴史	4. 巻 第701号
2. 論文標題 マルティン・ブーバーにおける歴史と記憶の聖書解釈学 いくつかの諸前提を中心にして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 理想	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴史	4. 巻 第65号
2. 論文標題 Y. H. イエルシャルミの「小さな本」 集合的記憶、ユダヤ学、「職業的なユダヤ人歴史家」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海学園大学人文論集	6. 最初と最後の頁 105-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴史	4. 巻 第64号
2. 論文標題 学問と対象 ユダヤ学に関するいくつかの予備的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海学園大学人文論集	6. 最初と最後の頁 117-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤貴史
2. 発表標題 人間の哲学的発見 コーエンとローゼンツヴァイク
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤貴史
2. 発表標題 フランツ・ローゼンツヴァイクのメシアニズム
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石崎嘉彦・厚見敬一郎 [編]、佐藤貴史・西永亮・野口雅弘・中金聡・高木西子・近藤和貴・杉田孝夫・高田純・井上弘貴・関口佐紀・吉永和加・佐藤一進 [著]	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 レオ・シュトラウスの政治哲学 『自然権と歴史』を読み解く	

1. 著者名 ヤン=ヴェルナー・ミュラー、板橋拓己・田口晃 [監訳]、五十嵐美香・五十嵐元道・川嶋周一・佐藤貴史・福田宏 [訳]	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 565 (担当部分 : 91-174)
3. 書名 試される民主主義 20世紀ヨーロッパの政治思想 (上) (下)	

1. 著者名 佐藤貴史・仲松優子・村中亮夫 [編著]、田中綾・手塚薫・柴田崇 [著]	4. 発行年 2018年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 294 (担当部分 : 3-12 [単著]、63-100 [単著]、267-269 [共著])
3. 書名 はじめての人文学 文化を学ぶ、世界と繋がる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(翻訳論文) イマヌエル・ヴォルフ「ユダヤ学概念について」(訳者解題と抄訳) (単訳、『北海学園大学人文論集』第70号、2021年)、pp. 127-144.</p> <p>(事典項目) 「ユダヤ神秘主義」(pp. 580-581) (『社会思想史事典』、丸善出版、2019年)</p> <p>(書評) フランツ・ローゼンツヴァイク、村岡晋一・田中直美編訳『新しい思考』(法政大学出版局、2019年) 「ローゼンツヴァイクの実践報告 彼自身の手によるドイツ・ユダヤ思想史の試み」(『図書新聞』3436号、依頼有、2020年2月22日)、3面。</p> <p>「丸山 空大『フランツ・ローゼンツヴァイク 生と啓示の哲学』」(『宗教哲学研究』第37号、昭和堂、招待有、2020年)、pp. 118-122.</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------